

【論考】

## ムスリム留学生との交流のために

### －調査・実践研究から見えてきた日本的共同性の視点－

For Interaction with Muslim International Students:  
From View Point of Japanese Commonality on Case and Practical Studies

山口大学大学教育機構留学生センター 中野 祥子

NAKANO Sachiko

(International Students Center, Yamaguchi University)

岡山大学大学院社会文化科学研究科 田中 共子

TANAKA Tomoko

(Graduate School of Humanities and Social Science, Okayama University)

キーワード：在日ムスリム留学生、異文化交流

#### 1. はじめに

近年、日本ではムスリム留学生の増加が注目されている。在日留学生数は、平成30年5月1日時点で29万8,980人にのぼる（日本学生支援機構，2019）。留学生の出身国も多様化し、インドネシア、マレーシア、バングラデシュ、サウジアラビア、トルコなど、イスラーム教を主な宗教とする国からの留学生は1万人を超える。このことから日本の大学において多数のムスリム（イスラーム教徒のこと）の留学生が在籍していることが予想できる。一方、日本社会においては、2015年には外国人ムスリムは約10万人で、日本人ムスリムは約1万人いるという（店田，2015）。イスラーム教徒は世界人口の4分の1を占めると言われており、今後増えつつあるとの見通しがあるものの、日本人にとってムスリムは、まだ馴染みの薄い小集団という面も否めない。

ムスリムは、イスラームの教えに基づいた価値観や守るべきとされる行動様式を持っている。例えば、1日5回の礼拝や年に一度1ヶ月間、ラマダーン月に行われる断食習慣、身体の露出や食事、婚前の男女交際の制約等がある（赤堀，2003）。飲食に関しては、アルコールと、豚肉およびイスラーム教の儀式に則った過程で処理されていない鶏肉および牛肉、両生類の飲食が禁じられている。イスラーム教の戒律によって食べることを許されたものを「ハラールフード」と言う。ムスリムは食事の際、

ハラールフードかどうかを確認する必要がある(赤堀, 2003)。その他に、賭けごとや銀行の利子など、活動をせずにして利益を生む行為が禁止されている(高橋, 2003)。身だしなみに関しては、成人の男性ムスリムはおへそから膝までを、女性は顔、手首、足首から先以外の全身を家族以外の異性の前で隠すことが望ましいとされ、女性は家の外ではヒジャブ(頭髪を隠すスカーフ)を着用している(桜井, 2003)。成人の男女は、家族以外の異性と仲良く話すことを控えなければならない(田中, 2006)、結婚前の性交渉や結婚を前提としない男女の付き合いは禁じられている(イスラーム文化センター, 2009)。ムスリムは、現世で戒律を忠実に守った者には、死後に訪れる来世において天国が与えられ、背いた者は地獄に落とされて永遠の責め苦を味わうとされている(吉田, 2003)。それゆえに、ムスリムにとって現世においてイスラームの教義に忠実に従い、神との関係を築くことは重要な意味を持ち、将来への不安を取り除くことにもなるという。日本に留学しているムスリム学生も、日本の学生生活の中で宗教的戒律を可能な限り守る努力をしていると考えられるが、モスク(イスラーム教徒の礼拝所)が少ない日本でお祈り場所の確保することに苦労したり、食べられるメニューの少なさに困難さを感じたりしている(中野・奥西・田中, 2015:図1)。

ムスリム留学生の増加に伴い、日本の大学では、学食におけるハラールフードやお祈り場所の提供等、宗教的ニーズへの対応が進められている。だが、宗教実践の対応策としての設備の充実や物理的な環境整備だけで十分な対応と言えるだろうか。対人接触を持たない留学はなく、日本の対人環境の中で留学生活が営まれる。独特な価値観を持つムスリム留学生と日本人との交流はどうだろうか。Nakano,

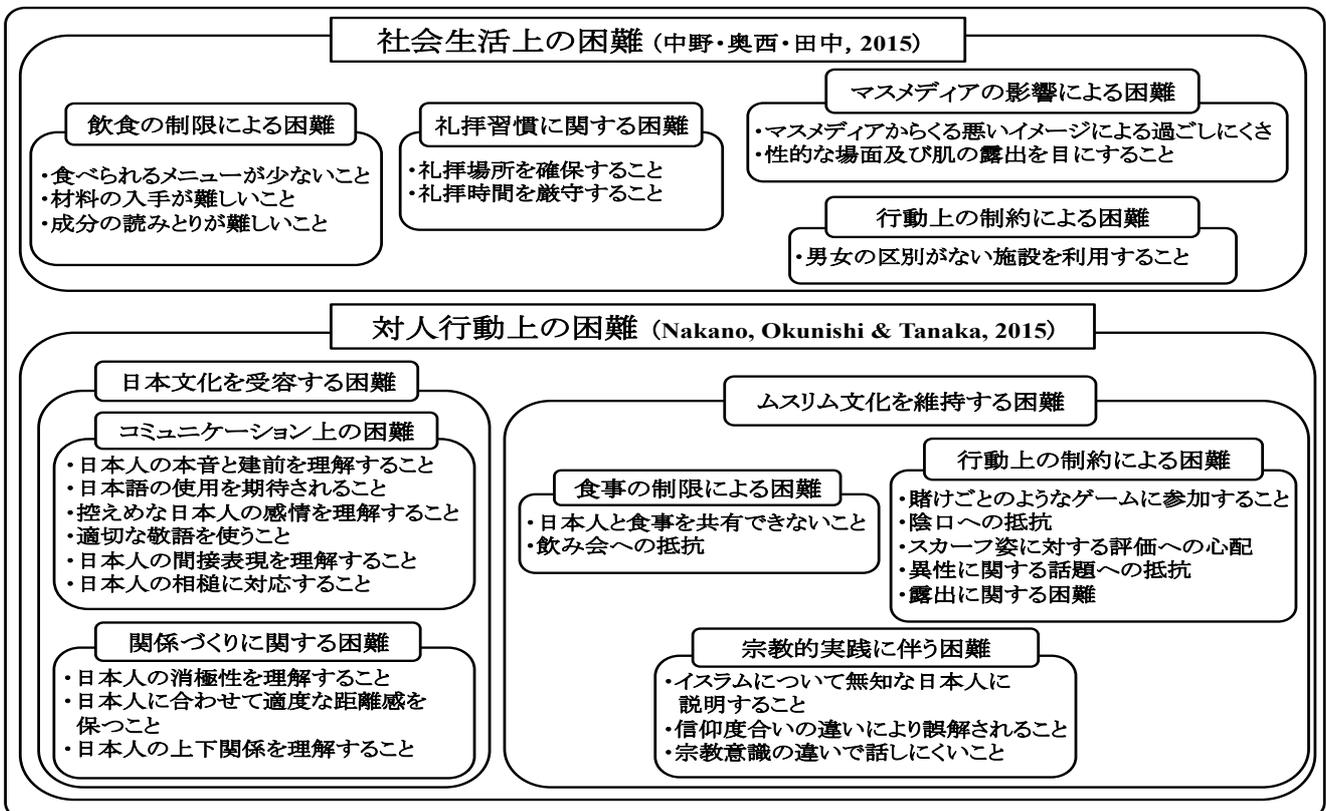


図1 在日ムスリム留学生の異文化接触上の困難

Okunishi & Tanaka (2015) では、在日ムスリム留学生が日本人との交流において文化的差異に基づく対人行動上の困難を感じていることを明らかにしている（図1）。日本人はムスリムに対して、信仰に厚く、宗教的戒律を厳格に守る、特殊で異質な人たちだという印象を持っており、ムスリムとうまく付き合える自信がないと認識する者が多数みられる（店田・岡井，2011；中野・田中，2015）。

本稿では日本人からみて異質に見えるかもしれないムスリムとの交流に焦点を当てたい。多文化共生社会では宗教的背景も多様化するため、ムスリムが隣人になることはより一般的になるだろう。ムスリム留学生と学生生活を共にする日本人には、彼らの文化的価値観や文化摩擦のポイントを理解し、対応を身につけ、交流の心得を持ち合わせておくことが望まれるだろう。

## 2. 目的

筆者らはこれまで、ムスリムと日本人の両者の視点からその関係形成について研究し、ムスリムと日本人との共生への示唆を得てきた。本稿では、ムスリムと日本人との交流に関連する先行研究から、交流の心得について手がかりになる知見を紹介し、日本人側とムスリム側の両視点から関係性を読み解く。そして日本で日本人が日本の社会的文脈下で実行しやすい対応を考え、共生社会の実現への一助としたい。具体的には、①文化理解、②対応方針、③表現方法、の3つの観点から、両者にとって建設的で気持ちのよい交流に向けた助言をまとめる。

## 3. 在日ムスリム留学生が日本人との交流時に抱く困難

まず大事なものは、ムスリム留学生が日本人との交流において、何に違和感を感じ、どのようなことが文化摩擦の要因になるのかを理解することと考えられる。ムスリム留学生は日本人との交流場面において対人行動上の困難（図1）を感じているが、このこと自体、知らない日本人は少なくない。図中に示された困難のカテゴリのうち、「日本文化を受容する困難」は他の在日留学生にも共通する困難である（田中・藤原，1992）。留学生から見たとき、日本人のコミュニケーションの取り方は、間接的かつ曖昧でわかりにくく、対人距離は広く冷たく感じるという。

イスラームという宗教を巡っては、「ムスリム文化を維持する困難」が経験されている。ムスリムがアルコールと豚肉を禁じられていることを知る日本人は多いが（中野ら，2015）、一見問題なさそうに見えるお菓子の中にも、ポークエキスや乳化剤、ゼラチン、動物油脂など、豚などの肉由来の成分が入っており、ムスリムの禁忌にあたる場合が多い。お土産のやりとりや、ゼミの休憩中の飲食等、学生間のやり取りで頻繁に交換されるお菓子を巡って、彼らの困惑がみられる（Nakanoら2015）。

なお日本人の理解が意外と薄いのは、信仰や戒律への向き合い方には個人差があるということである。日本人が優しさや気遣いから、ムスリムにとっての禁忌を避けてあげようとして、戒律を厳格に守るムスリム像を全てのムスリムに当てはめて一般化してしまう対応は、場合によっては彼らに居心

地の悪い思いをさせてしまう可能性も潜在させている。

異性に対する姿勢も悩ましい。日本人学生同士は、盛り上がる話題として恋の話や性的な話をする事が多々ある。だがムスリムの場合、婚前の交際や性行為が勧められていないため、そうした話題に違和感を覚え、恥ずかしさや気まずさを感じたりする。そこでイスラームの教えを説明しても、驚かれたり奇異な目で見られたり、あるいは気遣いから極度に距離を置かれることもあるという。日本人学生が友人関係を開始し深めていく過程で、恋愛の打ち明け話をしたり、性的な意味合いの冗談を言ったり、一緒にお酒を飲んで本音を言い合って打ち解けようとしたりする場合に、ムスリム留学生は反応に困ったり、その場に加われなかったりする。

賭け事については、日本人が最も想定しにくい文化摩擦の一つかもしれない。例えば、参加費 500 円を集めてビンゴゲーム大会をやった場合、景品として 500 円以上の物が当たった際に、それを賭け事になぞらえて抵抗を感じるムスリムもいる。この場面について、日本人学生約 130 名を対象に、文化アシミレーターによるクイズを行ったところ、上記の理由を推測できた者は 5 割を下回っていた(中野ら, 2015; 中野・田中, 2019)。

在日ムスリム留学生の困難事例の内容や困難感の度合いが、時間経過によってどう変わるかをみた研究もある(中野・田中・奥西, 2017)。ハラルフードやお祈り場所の確保といった社会生活上の困難は、時が経つにつれて慣れと行動のルーティーン化によって減少するが、日本人との交流における対人行動上の困難はさほど減らない。だが、興味深いことに対人行動上の困難は、交流相手の日本人が、ムスリムの宗教的戒律や文化摩擦の起きやすいポイントを理解しているだけで変わる。つまりムスリム側の困難の度合いや困難に遭遇する頻度が減り、交流しやすくなるのである。ムスリムが日本で感じやすい困難についてまずは理解しておくことを交流の心得の筆頭にあげておきたい。

#### 4. ムスリムに不慣れな日本人による対応

心得の第二点は、具体的な対応方針の設定の仕方についてである。ムスリムとの交流経験をほとんど持たない日本人学生に、「ムスリムとの付き合いにおいて大事だと思うこと」を尋ねた調査がある(中野ら, 2015)が、その回答は、ムスリムの宗教的・文化的価値観や行動の理解と尊重、および戒律への配慮といった、「相手の宗教的・文化的価値観に合わせていくスタンス」と、宗教に触れない、人として接する、共通点だけを見るといった、「宗教的価値観から離れて同じ人間としてカテゴライズして付き合うスタンス」、に二分された。「ムスリムとの文化摩擦解決のために大事なことは何か」と尋ねても、相手文化の理解や尊重、歩み寄りとの答えが大半を占めた。日本人学生は、相手に理解を示し、合わせることを重視していることがわかる。様々な在日留学生と日本人との交流研究では、日本人ホストがゲストである留学生に対して、日本の文化的行動や価値観を説明して誤解を解いたり、文化的仲介人として機能したりすることで、文化摩擦のない交流の実現を図る例がみられる。だが対ムスリ

ムの場合は、日本的価値観を説明して日本文化的振る舞いを相手に求めるという発想は、出てきにくい。ホストである日本人がムスリム留学生に歩み寄って行く発想に傾く点が、興味深い。

中野・田中（2017）では、対人行動の要領を学ぶソーシャルスキル学習の意図から、ムスリムに馴染みの薄い日本人学生を対象に、ムスリム留学生との交流時の文化摩擦場面を課題として、対処行動のロールプレイを試みた。具体的には、研究室でお菓子パーティーをした際に、サウジアラビア人留学生のAさんが何も食わずに困った顔をしているという場面で、自分ならどのように対応するかを寸劇方式で試してもらった。日本人学習者は、事前の予備知識により、サウジアラビア人のAさんがムスリムである可能性を明確に認識しながらも、宗教的な話題はパーソナルなことであり、公に聞くのは失礼だと発想し、遠回しに解決しようと努力した。すなわち問題を目立たせず、自然に映る振る舞いを心がけ、さりげなく問題を解消して、しかも相手に遠慮や申し訳なさを抱かせないように一生懸命に気遣って、理由の聞き方から、声かけの開始や雰囲気作り、返答の仕方に至るまで配慮していた（中野・田中，2017）。このとき日本人学生が意識して行ったとする振る舞いを多い順から挙げると、宗教に触れずに遠回しに理由を聞く、何も聞かないで受け入れて見守る、理由を聞かずに相手から言いやすい雰囲気を作って待つ、皆で楽しめる他のことを提案する、今度美味しいものを食べに行こうと誘う、その場でハラールフードを買いに行く、一緒に食べ物の成分表を確認する、であった。話をするときの雰囲気や態度に留意し、好意的で自然体な雰囲気作りに努めたとする者もいた。

自分の演技で更に改善したい点はと聞くと、問題が目立たないように小さな声で対応すること、理由を言われたときに戸惑いや驚きの表情を見せず、大した問題ではないという態度で接すること、その場の空気を壊さないように理由を尋ねること等が挙げられた。宗教について触れず、代わりに何らかの共行動を実行する姿勢からは、異質性を際立たせず、等質性に重きを置く姿勢がみてとれる。これは、日本人学生が対人関係において協調や調和を重視する規範を有するためと推測される。こうした協調や調和、協同を重んじる価値観を尊重するなら、友好的な雰囲気作りを促す行動は、普段の対人交流のスタンスを維持しながら実施できる、心理的負担の少ない、実行しやすい行為となろう。

## 5. ムスリムとの交流経験が豊富な日本人による対応

日本人による細かな気遣いとは裏腹に、ムスリム留学生の側は宗教に関することを直接質問しても全く構わないという（中野，2016）。むしろ、日本人と仲良くなる契機として、宗教の違いを話題にしようとするムスリム留学生もいる（中野・田中・奥西，2015）。例えば、スカーフを被っていることについて日本人が質問してくるだろうと想定して待っていたり、イスラーム教について日本人に教えてあげたいと準備したりしている（中野ら，2015）。先のロールプレイの折に、こうしたことを日本人学生に伝え、「宗教について質問してもよかったのか」、「宗教に触れないようにするのに苦労していたのに」、「そうはいつでも実際には聞きにくい」などと、どよめきの声があがりたりする。日本人に

とって宗教的な話題は、深刻でプライバシーに関わるものと捉えて、触れずにそっとしておこうとする様子がみえてくれる。だがムスリムにとっては、宗教は身近な話題である (Nakano et al., 2017)。特に秘するものではなく、この点に認識の差が存在する。

では、日本人に勧める対応として、ムスリムの宗教的ニーズについてははっきりと尋ねるように、配慮のしすぎにならないように注意しようと指導すればよいのだろうか。以下に紹介する、ムスリムとの交流経験が豊富な日本人に関する研究が、参考になるだろう。海外のムスリムの多い地域に居住する日本人たちは、ムスリムの文化的・宗教的規範や価値観を知っていても、戸惑いを感じたり、宗教に関することを堂々とはっきり尋ねたりする際には、心理的負担感を伴うという (Nakano & Tanaka, 2017; 中野・田中, 2019)。ムスリム留学生と良好な人間関係を築き、日常的に交流している日本人を対象に、彼らが経験した困難を聞き取ったところでは、ムスリムが目の前でお祈りをしている時にどういった振る舞いで待てばよいのかわからず困ったり、スカーフを急に被るようになったムスリム留学生にどう反応すればよいのかわからなかったり、相談した際に「それは神様からの試練だ」等と言って励まされたりすることに戸惑っていた (図2)。また、ムスリム学生から「気にしなくてもいい」と言われたとしても、断食中にムスリム学生の目の前で飲食しにくかったり、お酒や豚肉の飲食をしにくかったり、ムスリムの友達と会うときは露出の多い服装を着るのに抵抗があったりするという。日本人学生にしてみれば、ムスリム留学生に友人として嫌われたくないという気持ちを抱いたり、同じ行動を取れないことに罪悪感を感じたりしてしまうためではないかと推察される。

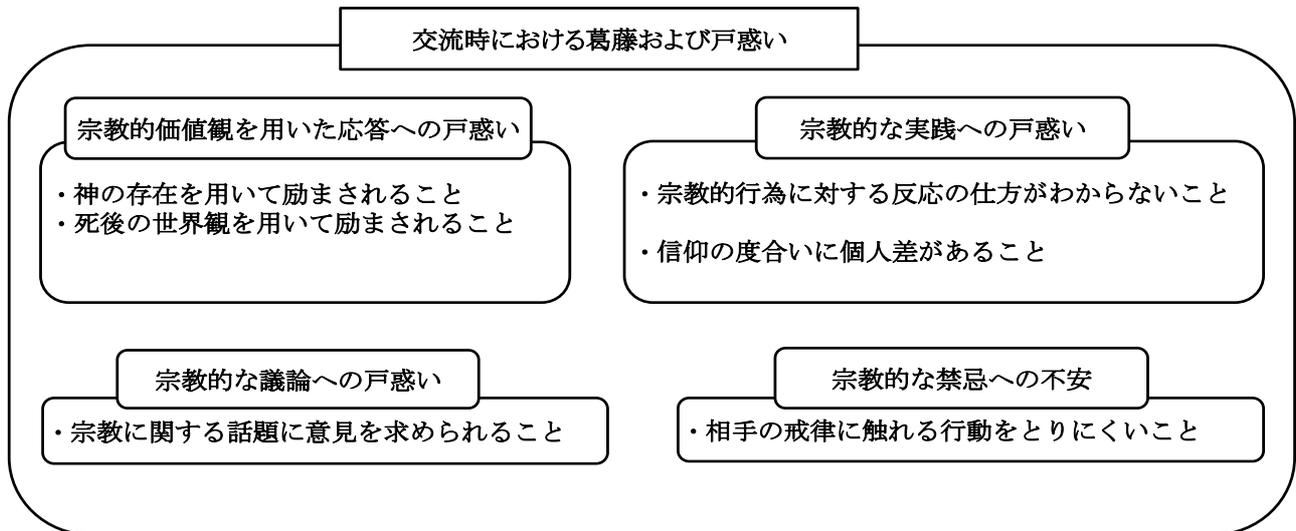


図2 ムスリムと良好な対人関係を築いた日本人が交流時に感じる葛藤 (中野・田中, 2017)

彼らから得られた、ムスリムとの関係形成、維持のための工夫の中心は、宗教的实践への配慮、宗教に干渉せず距離を置くこと、共通点への注目、積極的な働きかけ、の4点であった（図3）。例えば食の宗教的な制約や男女付き合いのあり方、服装に関する配慮を行い、中にはお祈りや断食を一緒にやってみるといった、かなり相手に歩み寄る対応もみられた。相手の宗教規範に合わせる際には、やはり「さりげなさ」を大事にしており、相手のために合わせているのではなく、あくまで自分の意思で、好んでその行動を選択しているという雰囲気を出すことに留意していた。「ムスリムの側が日本人である自分に合わすより、行動に制限のない自分がムスリムの側に合わす方が楽だ」と述べる人もいた。ムスリム留学生がたとえ「自分のことは気にしなくてもよい」と言っても、日本人の側は共行動をとりたがり、それができれば相手にとっても自分にとっても居心地が良いと感じており、相手が一人だけ自分たちと同じことができない時には、日本人の方が罪悪感や心理的負荷を感じてしまうという構図がそこにあるように思われる。そのためか彼らは区別をことさらに際立たせることなく、「ムスリム」としてよりも「同じ人間」とであるという共通点に目を向け、宗教的なことには干渉せず、相手との程よい距離を保って良好な関係を築くことに努めている。

彼らの対応にみられる特筆すべき行動の一つに、「相手から質問されない限り、食べ物の成分について言わないこと」が挙げられる。ここにムスリムに馴染みのない者と、実際にムスリムと良好な関係を形成している者の差を指摘できる。例えば、多くの在日ムスリム留学生にとって、日本において見慣れない語が小さな字で並ぶ食品の成分表示の読み取りは難しい。日本人が成分について事前に教え

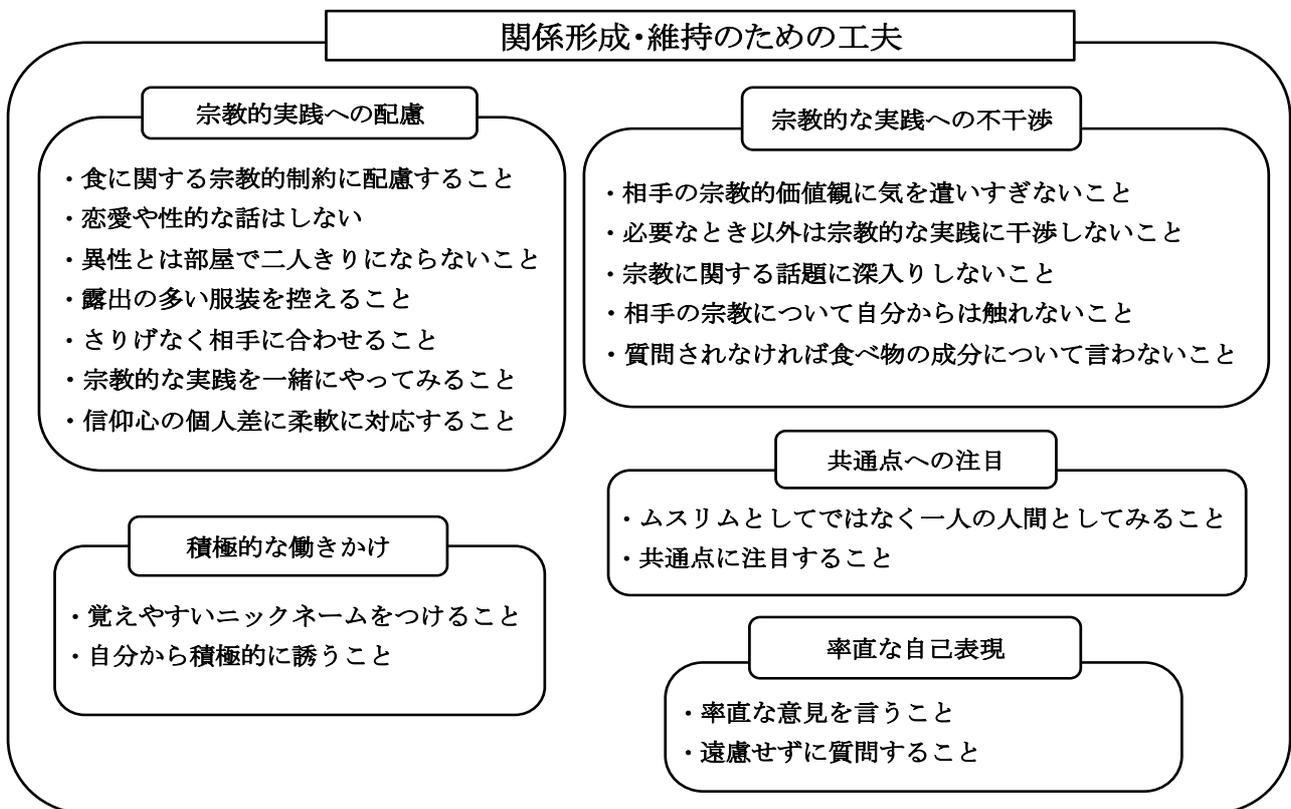


図3 日本人との良好な対人関係を築いた日本人が行う関係形成・維持のための工夫（中野ら，2017）

てくれることは難い反面、かえって食べられるメニューの少なさを助長させる面もある。イスラームの教えには、禁止成分が入っていることを知らずに食べた場合は、戒律を破ったことにはならないという考え方があるので、あえて細かく調べない場合もなくはない（中野・奥西・田中，2013）。友人が増え、食品の成分について事前に教えてくれるようになったため、食べられるものが以前より少なくなり、困難感が増えたという者もみられた（中野・田中・奥西，2017）。戒律を遵守する度合いには個人差があることを知った上で、一方的な配慮に陥ることなく適度な距離を心がけることが、快適な交流に繋がることもある。ムスリムと交流する中で、相手の表情や対応を見ながら、日本人が学び取っていった対応と考えられよう。

加えて、率直な自己表現も意識されている。これは広く在日留学生在が求めているところと一致する。日本人の示す感情が読み取りにくい表情や間接表現は、留学生には不可解に映る。率直な意見陳述は、留学生との意思疎通を助ける。確かめたいことがあれば遠慮せずに質問するという対応は、ムスリムに馴染みのない日本人学生には特に、心理的な負担を伴うものと予想される。だがこれは、トルコやインドネシアといったイスラーム圏に住む日本人も交流の秘訣として行っているもので、信仰度合いの個人差に向き合うためには、やはり相手にとってダメなものは何なのかを尋ねて、それを明確に把握することが大事との指摘がみられる（Nakano & Tanaka, 2017, 2018）。

最後に、同じでいよう、揃えようと努める同調的な配慮が、かえってムスリムに心理的罪悪感を与える場合もあることに注意を促しておきたい。例えば、あるムスリム留学生在が露出の制約により海で遊ぶことを断ったら、他の日本人メンバー全員が行き先を変えようと提案し、山に行くことになった（Nakano et al., 2015）。その留学生は、自分のせいでみんなが海にいけないことに申し訳なさや居心地の悪さを感じたという。またある学生は、ラマダーン中の遠足で「ランチタイムに何も食べなくてもいいか」と主催者に尋ねると、その遠足のプログラムが作り直され、ランチタイムという表現から「休憩」という言葉に変えられ、レストランに行くプランはなくなり、自由散策の時間が設定されたという。「昼食を食べたい人は食べても良いし、食べたくない人は食べなくてもいい」という行動の柔軟性を含んだ表現に置き換えることで、ムスリムの学生の行動が逸脱にあたらぬよう配慮したのである。

ただ、本人は皆が昼食を食べている間、食わずに自由に過ごす許可があればそれで良かった。自分のせいでプログラムを大きく変えられてしまって迷惑をかけたと責任を感じ、罪悪感を覚えていた。

日本人が良かれと思って行う、共同性を重くみてその確保を規範とみなす配慮のあり方と、ムスリム留学生在が求める処遇の間に齟齬が生じていることがわかる。工藤（2009）には、在日ムスリムが、日本社会を「“ひとそれぞれ”が許されない社会」と捉え、良心から無意識に同調行為を求められることに生きにくさを感じているとの記述がみられる。そこでムスリムへの宗教的配慮を行う際には、代

替案の中に「周囲と同じ行動をしなくてもいい」という選択肢を加えて提示することが勧められる。仲間の一員に対して当然のように共同性を求めてしまいがちな日本文化の中で、選択肢を与えてムスリム側に判断を委ねるという対応の方が、もしかしたら相手の心理的負担感が少ないかもしれないこと、自分たちもその方が皆で揃えるより実施しやすい対応かもしれないことを、考えてみてもよいだろう。

## 6. まとめ

日本人学生が、日本でムスリム留学生と交流する際に有用な心得を、3つの要点にまとめておきたい。まず1つ目は、「文化理解」である。在日ムスリムが日本人との交流で文化的差異を感じ困難を生じやすいポイント、日本人側がムスリムとの交流において違和感を抱きやすいポイントを把握し、ムスリムの信仰の向き合い方には個人差があることを理解して、その多様性を前提に交流する。

2つ目は、「対応方針」である。最低限の宗教的配慮を「さりげなく」行い、過度に干渉しない姿勢を持ち、宗教的価値観を受け入れたうえで率直な意見表明に努める態度、そして共通点に目を向けて一緒にできることを探すなどの姿勢が役に立つだろう。ここには文化摩擦の発生を読み解こうとしたり、戒律の実践度合いの個人差を見極めるための問いかけも含まれる。

上記の行為を、率直なコミュニケーションの習慣を持たない日本人学生が心理的負担感なく行うには、少し言い方や示し方を工夫してみるとよいだろう。それが3つ目の、「表現方法」である。自然体と思わせる振る舞い方や話しやすい雰囲気づくりを始め、共行動を可能にする代替案の選択肢に「同じ行動を取らなくてもいい」というオプションを加えることも含めて、表現の工夫といえる。在日留学生にわかりやすい伝達という意味では、間接表現をできるだけ避け、感情が読みにくい表情に注意を払い、努めて率直な表現を活用することが、理解の助けにはなるだろう。

これらの3つの要点を意識して、社会的文脈に適した態度や方略を使いこなしていけば、双方に「適度な距離感」が創り出されて、バランスのとれた良好な関係の構築に繋がると期待される。こうした仲間入りの設定は、日本人にとって関係のスタートラインについていることを意味し、交流はその後に生まれる。相手のニーズを察して満足させようとする努力がおもてなしだとしたら、外来者も仲間でありたいだろうとみて斉一性に組み込むのも、常識化したおもてなし感覚の現れといえるのかもしれない。西洋文化圏では交渉や主張、個性の尊重を重んじる傾向があるが、そのスタイルが異文化対応の場面でいわば標準視されてきた感があるのは、異文化間の意思疎通の研究が欧米で先行したためもあるだろう。だが日本でそうした行為を課した場合、背景の文化差ゆえに、心理的な負担感や負債感、違和感が生じる可能性が考えられる。本稿で勧める対応の心得は、文化的な差異を顕在化させて認め合い、個人の独立性と主体性を主軸に据える個人主義的な共生観とは、意味合いを異にする。日本人が求め、好み、大事にして、発想しやすい対応があることをまず認識したい。日本的な思いやりの

まなざしで互いの差異を顕現化させないようにふるまい、状況を察して相手にさりげなく合わせ、負担感を生じさせない配慮をしようとする。違いを際立たせて承認させるというより、共行動を確保し共通性に注意を向け、共感を基本に据える。日本の社会文化的環境で育まれたこのような心理を理解したところに、実効性のある関係形成の方略が生まれてくるのではないかと。人々の声を聞き、日本人がしてしまいがちな対応と、ムスリムが受け容れやすい対応とをすりあわせ、問題解決に向く形を選び取っていくことが、方略の明確化に繋っていくだろう。

本稿では、ムスリムと日本人との交流について分析した調査・実践研究を基に、関係形成へと踏み出す際に用いる、日本人の視点を組み込んだ、採用しやすい方略を提案しようと考えた。これを日本的な共同性に基づいた、共生社会構築への対応と呼んでもよいかもしれない。

## 7. 今後の課題

我々は、在日ムスリム留学生の異文化接触場面における困難とその対処方略について研究を重ねてきた。知見を適切な適応支援に繋げていければと願っている。困難の経験をどう乗り越えていくかという具体的な対処方略も興味深い主題だが、その報告はまたの機会に譲りたい。

## 引用文献

- 赤堀雅幸 (2003). 禁じられた食べ物 後藤晃・山内昌之 (編) イスラームとは何か (pp. 198-199) 新書館
- イスラーム文化センター (2009). イスラームという生き方—その50の魅力— イスラーム文化センター
- 店田廣文 (2015). イスラーム教徒の人口推計 早稲田大学多民族世代社会研究, 1-16.
- 店田廣文・岡井宏文 (2011). 外国人に関する意識調査 岐阜市報告書 早稲田大学人間科学学術院 アジア社会論研究室, 1-113.
- 中野祥子 (2016) 『日本人学生むけムスリム文化アシミレーター』 大学生協出版 1-22.
- 中野祥子・奥西有理・田中共子 (2013). 在日ムスリム留学生の異文化適応-異文化接触場面における異文化葛藤への対処の観点から 第10回日本質的心理学会年次大会
- 中野祥子・奥西有理・田中共子 (2015) 在日ムスリム留学生の社会生活上の困難 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要, 39, 137-151.
- Nakano, S., Okunishi, Y. & Tanaka, T. (2015). Interpersonal Behavioral Difficulties of Muslim Students in Japan During Intercultural Contact Situations. In Rogelia, P. (ed.) 'Enhancing Quality of Life through Community Integrity and Cultural Diversity: Promoting Indigenous, Social and Cultural Psychology', Progress in Asian Social

- Psychology Series Volume 10 (pp.154-170). Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- 中野祥子・田中共子 (2015) 日本人学生を対象としたムスリム文化アシミレーターを用いた異文化間教育の試み 留学生教育, 20, 83-92.
- 中野祥子・田中共子 (2017) 日本人ホストはムスリム留学生とどのように対人関係を築くのか 多文化関係学, 14, 59-77
- Nakano, S. & Tanaka, T. (2017) The Implications of Japanese people' s Cross-cultural Social Skills in Turkey: Forming Relationships with Turkish Muslim. The Asian Conference on Psychology & the Behavioral Sciences 2017 Official Conference Proceedings. <https://papers.iafor.org/submission34398/>
- 中野祥子・田中共子 (2018). 日本人学生を対象としたムスリム文化アシミレーターを用いた異文化間教育の試み-異文化間ソーシャルスキルの視点から 異文化間教育, 48, 146-160.
- 中野祥子・田中共子 (2019). 日本人学生むけムスリム文化アシミレーターの改訂版を用いた異文化間教育の試み 文化共生学研究, 18, 53-66.
- Nakano, S., & Tanaka, T. (2018). The implications of social skills on the formation of relationships between Indonesian Muslims and Japanese. In M. Karasawa, M. Yuki, K. Ishii, Y. Uchida, K. Sato, & W. Friedlmeier (Eds.), Venture into cross-cultural psychology: Proceedings from the 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology. [https://scholarworks.gvsu.edu/iaccp\\_papers/141/](https://scholarworks.gvsu.edu/iaccp_papers/141/)
- 中野祥子・田中共子・奥西有理 (2015) 在日ムスリム留学生の異文化適応スタイル—2年後の振り返りにみる渡日後の変化に関する認知— 第36回異文化間教育学会年次大会発表
- 中野祥子・田中共子・奥西有理 (2015) 在日ムスリム留学生の異文化適応スタイル—2年後の振り返りにみる渡日後の変化に関する認知— 第36回異文化間教育学会年次大会発表
- 中野祥子・田中共子・奥西有理 (2017). 在日ムスリム留学生の異文化滞在に伴う困難の変容— 国立大学理工系学生の5名の2年間を振り返る事例分析 異文化間教育, 46, 140-151.
- 中野祥子・田中共子 (2019). 在トルコ日本人における対人行動上の困難-トルコ人との異文化交流における葛藤経験- 異文化間教育, 50, (印刷中)
- 日本学生支援機構 (2019). 平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果 [https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2018/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/01/16/datah30z1.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2018/__icsFiles/afieldfile/2019/01/16/datah30z1.pdf) (2019年6月15日)
- 桜井啓子 (2003). 後藤晃・山内昌之 (編) イスラームとは何か (pp.200-201) 新書館
- 高橋和夫 (2003) 後藤晃・山内昌之 (編) イスラームとは何か 新書館
- 田中京子 (2006). ムスリム学生たちと築くキャンパスの多文化環境について 名古屋大学 留

学生センター紀要 第4号, 名古屋大学留学生センター

田中共子・藤原武弘 (1992). 在日外国人留学生の対人行動上の困難: 異文化適応を促進するための日本のソーシャルスキルの検討 社会心理学研究, 7 (2), 92-101.

吉田京子 (2003). 天国と地獄 後藤晃・山内昌之(編) イスラームとは何か 新書館 pp. 18-19.